夏季大会　構成吟

流祖岩渕神風先生の吟道を学ぶ

詩吟神風流総本部　事務局　境　神鵬　案

平成三十年二月一日

夏季大会　構成吟（案）

流祖岩渕神風先生の吟道を学ぶ

恩師流祖岩渕神風先生は、昭和六十一年二月十二日、正義と情熱の波乱に満ちた八十四年の生涯を終えられました。

恩師逝いて三十二年、今こそ流祖の開かれた詩吟神風流の原点を見つめ、原点に帰って行動すべき時だと思います。本日は流祖の残された漢詩を通して「詩吟報国」と叫ばれた恩師の吟道の一旦を、学びたいと思います。

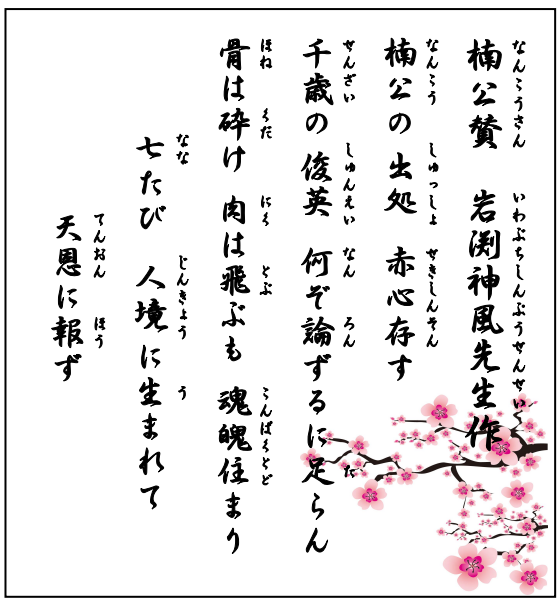
①「楠公賛」　流祖岩渕神風先生作

岡村神禅さんの吟をお聞きいただきました。流祖岩渕神風先生の熱き魂魄に溢れ、凄まじい生き様を感じる漢詩であり、その節調は見事なまでに詩心を表現されていると思います。「骨は砕け肉は飛ぶも魂魄住まり」これほどに激しく、楠公を讃えた詩はないと思います。そして、その激しさが流祖神風先生そのものと言えるのではないでしょうか。

楠公、すなわち楠正成とは鎌倉末期から南北朝時代にかけて活躍した。後醍醐天皇に最後まで忠義を尽くした正義の武将です。大阪・千早赤坂村の山里に生まれ、金剛山

背景　①　富士と先生

背景　②　楠公賛　詩文



一帯を本拠地とする。後醍醐天皇を奉じて鎌倉幕府打倒に貢献し，建武の新政の立役者として足利尊氏らと共に天皇を助けた。尊氏の反抗後は新田義貞、北畠顕家とともに南朝側の軍の一翼を担ったが、湊川の戦いで尊氏の軍に敗れて自害しました。

松原つづく皇居外苑の一角に楠木正成公の銅像はあります。二重橋を正面に見据え、皇居に何が起きても駆けつけられる方向に設置されているのです。

楠公を詠じた詩は数多くあります。その中で本日は徳川斉昭作の「大楠公」を　渡部　神菖さんに、日柳燕石作の「楠公を詠ず」を山崎神勝さんに吟じていただきます。

②「大楠公」　徳川　斉昭作

③「楠公を詠ず」　日柳　燕石作

背景　③　楠正成銅像

背景　④　楠正成銅像

背景　⑤　楠正成銅像

「国は敗れたにもかかわらず、万民は酔夢より一向に覚めようともせず」

という流祖の生気の誠を表現された「言志」には流祖の吟道に対する思いが溢れています。

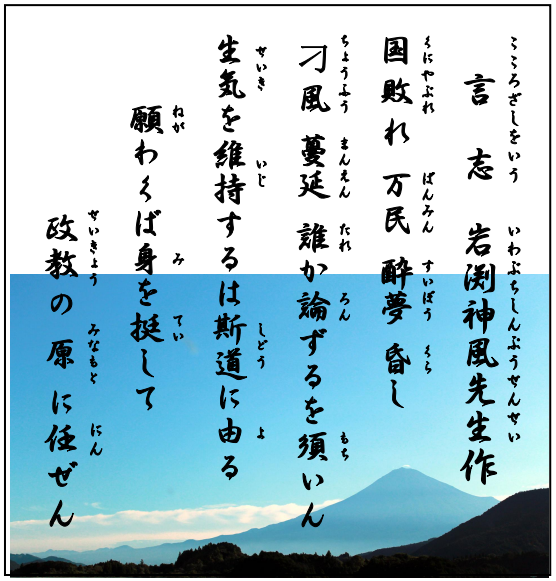
道徳はすでに地に堕ち、狡猾な風習は広がる一方であるのに誰も正義を論じようとしない。

天地正大の気を維持するには詩道によるより他に術はない。幸いに我は早くより詩道に励んできた。願わくは我は吾身を挺して日本の政教の原に任じようと思う。これこそ真の日本人たるものの進むべき道である。

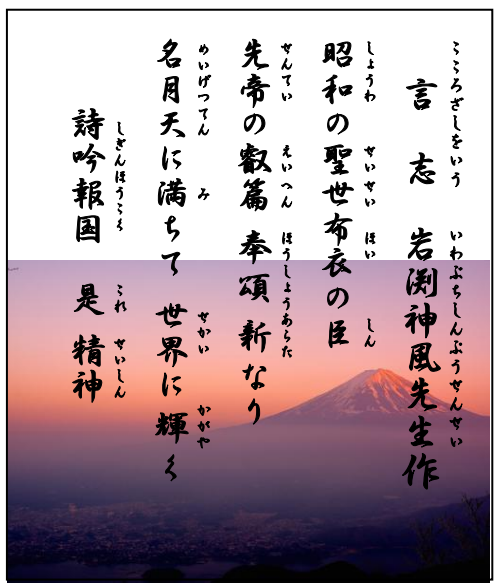
岩渕神風先生作の「言志」を大平神州さんに吟じていただきます。

④「言志」　流祖岩渕神風先生作

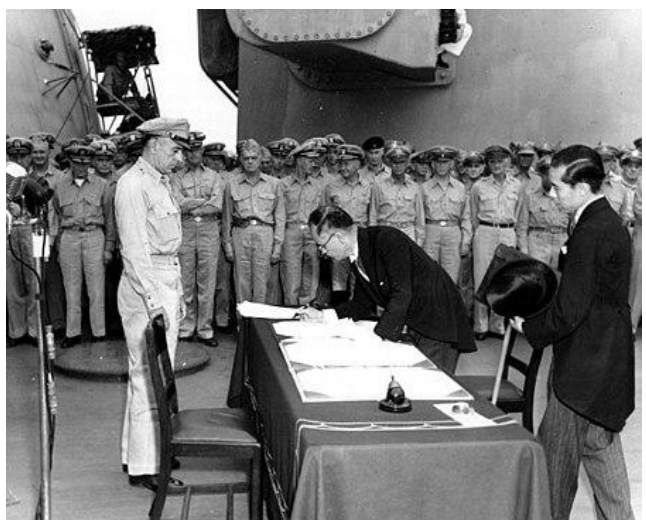
背景　⑦　言志　詩文



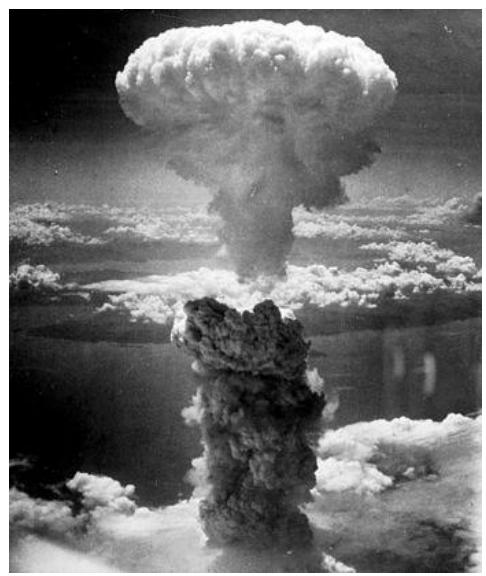
背景　⑧　言志　詩文



背景　⑥　第二次世界大戦



背景　⑤　第二次世界大戦



ある人が、流祖に「詩吟とは何ですか」と問われた時に、流祖は「詩吟とは死に物狂いにやるものだ。」と答えられたそうであります。死に物狂いにやるという詩吟に対する姿勢を万分の一でも

学びたいと思います。

私はただただ「詩吟報国」この四字の精神を以て私の一生を貫こうとするものでございます。と言われ激しく、そして強い決意で「詩吟報国」と叫ばれた流祖の志を　松下神翔さんに吟じていただきます。

⑤「言志」　岩渕神風先生作

神風流の詩吟は、決して激しく強いだけではありません。李白の代表的な三詩を通して、詩情を見事に表現された流祖の細やかな節調を味わい下さい。

転句に和歌調を取り入れて，愈州を下る李白の切ない思いが伝わってくるようです。「峨眉山月の歌」を　大平神薙さんに吟じていただきます。

⑥「峨眉山月の歌」　李白 作

谷崎潤一郎著「文章読本」に静夜思の解説が載っております。この詩にはなにか永遠な美しさがあります。ごらんのとおり、述べてある事柄はいたって簡単でありまして、「自分の寝台の前に月が照っている。その光が白く冴えて霜のように見える。自分は頭を挙げて山上の月影を望み、頭を垂れて遠い故郷のことを思う。」というだけのことにすぎませんけど、その情景が不思議にありありと浮かぶのであります。（略）と述べております。流祖神風先生の吟を聞くと、まさしくその情景が不思議にありありと浮かんできます。

では、「静夜思」を　境　神鵬さんに吟じていただきます。

⑦「静夜思」　李白　作

背景　⑨　峨眉山月の歌

背景　⑩　静夜思

君は如何なる意思をもって、こんな深山にいつまでも棲むのか、という問いに笑って一言の答えもせず、ただ何となく心は自然とのどかである。さて桃花流水の裏に深く行けば、別の天地があって、この上もなき楽土なり。という俗世間にこだわらない、ゆったりとした世界を、流祖は絶妙な節調で表現されました。「山中問答」を　木崎弘風さんに吟じていただきます。

⑧「山中問答」　李白　作

背景　⑪　山中問答

雲井龍雄は米沢に生まれ幕末から維新期にかけて活躍した志士です。新政権の集議院議員になるもひと月足らずで集議院を追われた。長州、土佐系高官と謀り新政府の転覆を策したが、捕らえられ若干二十七歳で小伝馬町牢獄で刑死します。流祖が残された和歌「雲井龍雄の墓前にて」を岩渕公胤宗家に吟じていただきます。

背景　⑫　和歌詩文

本日の最後は、流祖の肉声をテープでお聞きいただきます。

背景　⑬雲井龍雄を懐う